

附属幼稚園の教育(4)

発達のとらえ方とそれをふまえた

指導のあり方について その1

村石 京



今回は「発達」について、少し考えてみたいと思います。幼稚園の教育の目的は「幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長すること」と学校教育法に定められています。このことは幼稚園教育とは、幼児の心身の発達の助けになるように、それにふさわしい環境構成をし、その中で指導を行っていくということになります。

それならば、保育に臨む者は幼児の発達をどのようにとらえていくのがよいのでしょうか。ここで述

べることは、「発達」のとらえ方は多様であることを知りつつも、日頃私自身が考えていることであるとともに、附属幼稚園での保育の中の考え方として述べていきたいと思えます。

まず、「発達」についての附属幼稚園のとらえ方の変遷と、「指導のあり方」の移り変わりなどから入っていききたいと思います。現在より大分以前、つまり私が幼児教育のことをやりはじめた頃には、附属幼稚園では幼児の発達を「年齢的な発達」という

ことで考えていました。幼児教育界の全般的な考え方も同様であったのだと思います。幼児の発達を〇歳〇か月というところに視点をあててみて、まずその年齢におけるスタンダードな発達を理解し、それならばこの年齢の子どもはこの位のが出来るとか、このような指導が適切であるといった考え方をしていました。

教育はまず年齢的発達を知った上で、しっかりとプランニングを行い、それに沿った指導をすることが、幼児をよりよく伸ばすことであると考え、実践してきました。例えば、研究的にある一つのテーマを設定し、三歳・四歳・五歳の夫々の年齢に、同一テーマでの遊びや遊具を与えて、それに対する興味の持ち方、深まり、子どものかかわり方、遊びの盛り上がり、遊びの継続時間の差などを調べてみました。これも年齢による発達の違いを理解した上で、指導のあり方を考えていくという研究でした。

次に教育要領の六領域が制定された年代頃には、領域別に保育内容の研究を進めていくことが主流となりました。その当時の研究テーマは当然領域毎の研究であったり、活動のあり方の研究であったりしていました。

そして世の中の考え方の影響を受けつつも、現実の幼児の生活や活動を見つめていくうちに、それらはもっともっと統合されたものが多く、種々な分野のものが入り混じっているのではないだろうかと思えてきたりもしてきました。現在は平成二年度よりの新教育要領により、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域となり、この五つの柱に沿って、保育の内容や指導のあり方を考えていくことになりました。勿論子ども園に於ても、当然これを受けての保育が行われています。

このように幼児教育における発達の見方や指導のあり方についての考え方は、時代の流れとともに少しずつ変化してきました。しかしふりかえってみる

と、いつの時代にもずっと変わらないものもありま
す。それはどの時代にも、そしてどの考え方にたっ
ても、「どのようにしたら幼児のためによりよい教
育が出来るだろうか」ということを根本にしている
ことです。時の移り変わりとともに、保育について
の考え方や、指導のあり方の変化があったというこ
とは、何か革命的に急激に行われたのではなく、以
前からのものを土台としてその上に積み重ねたり、
先輩の考えたものを土壌として学びながら培って、
現在にいたったものなのです。根本にある、「幼児
のため」という考え方はいつの時代も少しも変わっ
ていませんし、これからのような時代になったと
しても、教育の方法等が変わったとしても、このこ
とだけはずっと変わらずに受け継いでいてほしい
と考えています。

さて、このような保育の変遷というものを背景に
持ちながら、現在の保育があるわけですが、ここで
現在の私どもの園での「発達」についての考え方を

述べてみますと、現在は附属幼稚園では、発達は
「個々の過程である」と考え、一人ひとりの子ども
の発達の道すじを大切にしていきたいという考え方
を持っています。

それでは、どうしてこのような考え方になってき
たのでしょうか。「発達は個の道すじ」というとら
え方をするまでは様々な過程がありました。幼児自
身、その時代、その社会に生きている存在なので
から、時代や社会の動きの影響を受け、変わってき
ていきます。幼児が時代とともに変わってきていれ
ば、当然指導のあり方も実際の幼児に即して変化し
てきたとみることも出来ます。また私ども幼児教育
をする者の考え方が、その時代、その社会の考え方
に沿ったり、影響を受けたりして、それを軸として
指導法を考えてきたという面もあります。保育者も
また社会に生きる人間として、社会の動きや時代の
流れの影響を受けている存在であるからです。考え
がうまく進められずに、悩んでいたことも多くあり

ます。そして現在の考え方になりました。

現在も勿論、附属幼稚園にも発達を年齢によってとらえるという見方も、ある部分としては当然あります。暦年齢で見られる三歳児の発達、四歳児の発達、五歳児の発達の姿といった概略的な発達段階というものがあります。それ故にこそ、年齢毎の級編成をしているわけです。しかしこの暦年齢による枠組の中のみ考えをしまうと、どうしても次には三歳児の一学期の姿はこのようであるとか、五歳児の三学期の発達段階はこうであるといったようになって次第に枠組が細分化していきます。そしてそれに合わない子どもを無理に背伸びさせようとしたりして、一律の基準のところに合わせようとしがちになります。しかし現実の子どもというものは性格と同じように、その発達も一人ひとりみな異なり、決して枠の中に入れられるようなものではありません。個々の子どもの発達は、一人ひとりみな

違っているのですから、一律に見ようとするとそこから問題が生じてきます。

更に、子どもの発達は、個々の中には一つの道すじと見られるものはあるけれど、基準があったり、(イ)の発達段階の次には(ロ)の発達がみられるといった、順序だてた定型化したものであるはずもありません。

発達とは、あくまでも一人の幼児が人間として育っていく過程の中での、連続的な変化の道すじなのです。それは螺旋状ともいえるような工程の中で、進んだり、止まったり、あるいは戻ったりと様々な変化の様相を見せながらも、やがては道すじをつくりつつ次第に高く登っていくものです。これが「発達の過程」なのであると考えています。

(次号ではこの考え方を基として、実際の指導をどう進めたらよいかについて述べたいと思います。)

(お茶の水女子大学附属幼稚園)